

音楽

目次

要約	2
はじめに	4
1. 学校での音楽	5
●他教科と比較して——音楽の位置	5
●授業での楽しさ	9
●授業での経験	11
●音楽の得意な理由	13
●将来への影響	15
2. 音楽の知識	17
●うたえる歌と知っている曲	17
●音楽の知識	21
3. 家庭での音楽	23
●音楽の習い事	23
●家にあるもの	26
●家庭での音楽体験	27
●テレビとのつきあい	29
●好きな音楽	32
●知っている人物	35
●両親と音楽の関係	38
まとめに代えて	40
子ども研究ノート⑧ 母親	深谷昌志……41
資料1 調査票見本	46
資料2 学年・性別集計表	58

禮

行予定

3月刊)

月刊)

歳

円

調査レポート／音楽

要約



① 音楽は好きか

「とても」の29%を含めて、「好き」と答えた子は73%に達する。しかし、女子は90%が音楽好きなのに、男子の音楽好きは57%にとどまった(図2)。



② 音楽の好き嫌い

教科の中では、「とても好き」の割合が4位で、ほぼ中間に位置する(図3)。



③ 楽しい音楽の授業

レコード鑑賞と合奏が楽しい。しかし、テストやリズムにあわせて踊るのは敬遠したい(図7)。



④ うたえる歌

「校歌」95%、「かえるの合唱」93%、「春が来た」88%の割合である(図16)。

調査概要

1. 調査主題 音楽
2. 調査視点 教科の中の音楽にかたよらず、子どもたちは日常どのような音楽行動をとっているのかをさぐる。
3. 調査項目 音楽の授業について／音楽は将来役立つか／うたえる歌／知っている曲／家庭での音楽体験など

放送大学教授 深谷昌志

横浜市立鳥が丘小学校教諭 戸塚 智

⑤知っている曲

「トルコ行進曲」や「運命」は知っているが、「軽騎兵」序曲は知らない(図17)。

⑥音楽の習い事

ピアノなどの楽器を習っている子は26%で、やめた子を含めると42%となる(図20)。

⑦家にある音楽用具

「ステレオやラジカセ」89%、「ビデオ」62%、「ウォークマン」54%など、家庭には音楽用具は多い(図25)。

⑧よく見る音楽番組

「紅白歌合戦」67%、「レコード大賞」42%など、テレビの音楽番組を見ている子は多い(図30)。

⑨好きな曲

第1位が「運命」、2位が中山美穂の「派手!!!」、3位が「トルコ行進曲」だった(表4)。

ま と め

子どもたちのまわりに音楽がみちあふれている。それだけに、教科としての音楽が、どういう面に独自性を発揮したらよいかはむずかしい問題であろう。クラシック音楽の好きな子が多いあたりに、音楽教育の成果が認められるが、そうした反面、男の子の音楽嫌いを克服できないあたりに、音楽教育の今後の課題を感じた。

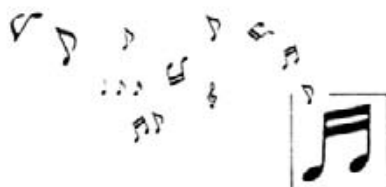
- 4.調査時期 昭和62年5月～6月
5.調査対象 小学5・6年生
6.調査方法 学校通しによる質問紙調査

7. サルプル数

(人)

学年/性	男子	女子	計
5年	260	241	501
6年	349	323	672
計	609	564	1,173

はじめに



高学年になると音楽の授業は、たいがい専科の先生になる。たいていは、やさしい女の先生で、担任とはひと味違った雰囲気なので、子どもたちは、いつもより新鮮な感覚で授業にのぞんでいる。しかし、週2時間という授業時間数からしても音楽は、いわば国語や算数などの主要教科外の勉強として位置し、子どもや親からはあまり重要視されていない教科というのが現状であろう。

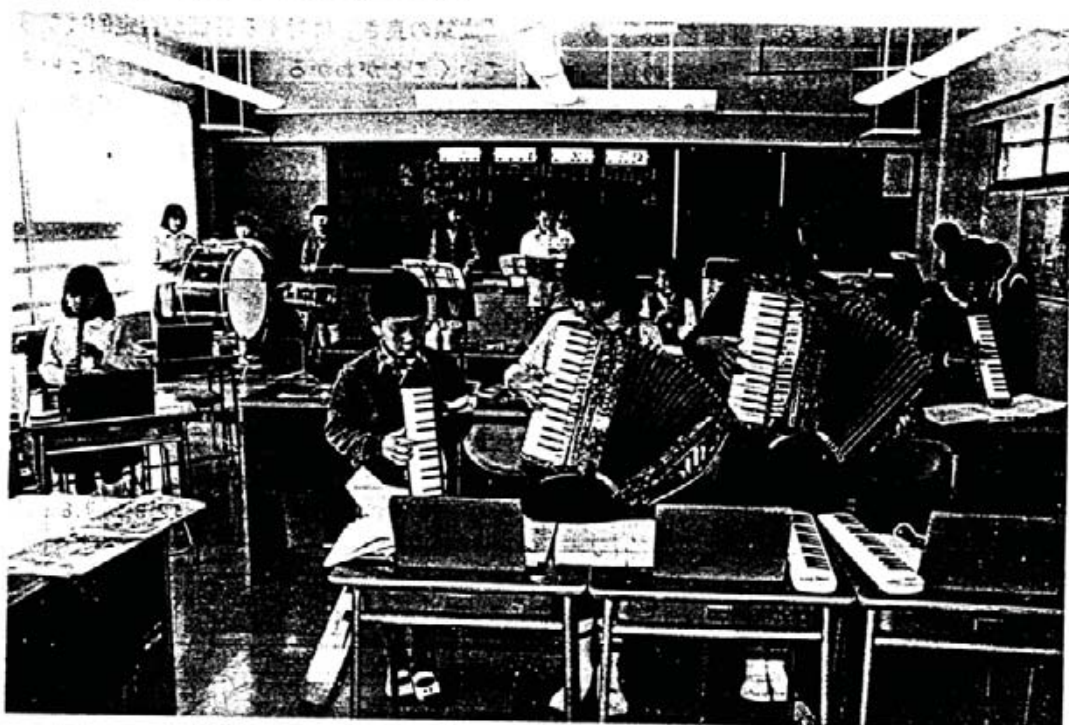
とはいっても学校では、運動会や卒業式をはじめとするあらゆる行事や儀式に校歌などの歌や合唱・合奏が披露され、音楽なくしては学校行事が成立しないと言っても言い過ぎではない。それに、おそらく子どもたちが社会へ出てからも、家庭をもつにいたっても、いたるところでさまざまな音楽に接し、その知識や能力が必要とされる場面も少なくないだろう。そういう意味では、音楽は子どもたちの将来の生活をより一層豊かにしていく大切な教科であろう。

そうした音楽教育のあり方はともあれこのところ、テレビをはじめとしてラジカセ・ウ

ォークマン・カラオケ・CD・レーザーディスク・シンセサイザー・DATなど音楽に関係した多種の機械類が発明され、若者たちの心をとらえているだけでなく、子どもたちの日常生活にも大きな影響を与えている。加えて外国からは、マドンナやマイケル・ジャクソンをはじめ、いろいろなミュージシャンやオーケストラなどが来日し、毎日のように日本のどこかでコンサートをくりひろげているので、自然とそれらの音楽や情報が子どもたちの耳にも達することになる。

いわば、そうした生活の中での音楽は豊かになっているのに、学校の音楽は昔ながらで、その差は開く一方という感じがする。それだけに、現在の子どもたちが学校音楽に対してどのように思っているのか、また日常どのような音楽行動をとっているのかなどについて明らかにしようとしたのが本レポートである。したがって教科としての音楽にかたよることなく、広い意味での音楽と考え、その意識や経験の実際をさぐってみた。では、さっそくその結果を報告することにしたい。

1. 学校での音楽



他教科と比較して——音楽の位置

まず、子どもたちが音楽に対して、どんな気持ちを抱いているのかを他教科と比較してみたのが図1である。教科の中で音楽を「一番得意」または「一番苦手」としたのがともに12%で、8教科の中では、ごく平均的な割合である。しかし、「先生が熱心に教えてくれる」(9%)、「成績が良いと家の人かほめてくれる」(6%)の割合はかなり低くなり、まして「時間をかけて勉強する」「おとなになって、役に立つ」となると、1%そこそこで、他教科にくらべて、かなり軽視されている教科といえよう。

次に図2は、単純に音楽の好き嫌いをたずねた結果である。「とても好き」は全体の29%、「やや」までを含めると73%となり、全体的に好意をもってむかえられている教科といえる。しかし、男女の比較をしてみると、

「とても好き」が男子の14%、「やや」までを含めると57%であるのに対して、女子は「とても好き」が46%、「やや」までを含めると90%にも達する。どうやら音楽という教科は、特に女子に人気のある教科といえそうである。また、ここで注目しておきたいのは、男子の4分の1が「とても・かなり嫌い」と答えている事実であろう。

さらに好き嫌いについて他教科との比較でみたものが図3で、「とても好き」の割合が体育・図工・家庭科について4番めに位置していることがわかる(これは、先の「モノグラフ・小学生ナウ」で調査した「教科(社会科・算数)」とほぼ同じ数値となっている)。音楽は相対的に中くらいの人気の教科といえそうである。だが、「とても嫌い」が9%もあり、これは8教科中もっとも高い数値であ

って、少々気がかりである。

好き嫌いと同様に子どもたちが音楽に対して、どのような意識をもち、評価をしているかを「授業の楽しさ」「得意さ」「成績の良さ」でたずねた結果が図4、図5、図6である。それぞれを性別・学年別で比較してみると、女子は男子にくらべて圧倒的に音楽の授業が

楽しく、得意であり、成績も良いと答えており、学年が6年になると「楽しさ」「得意さ」「成績の良さ」に対する評価が否定的になっていくことがわかる。さしずめ、音楽という教科は「女高男低」という言葉で代表される感がある。

図1 教科イメージ

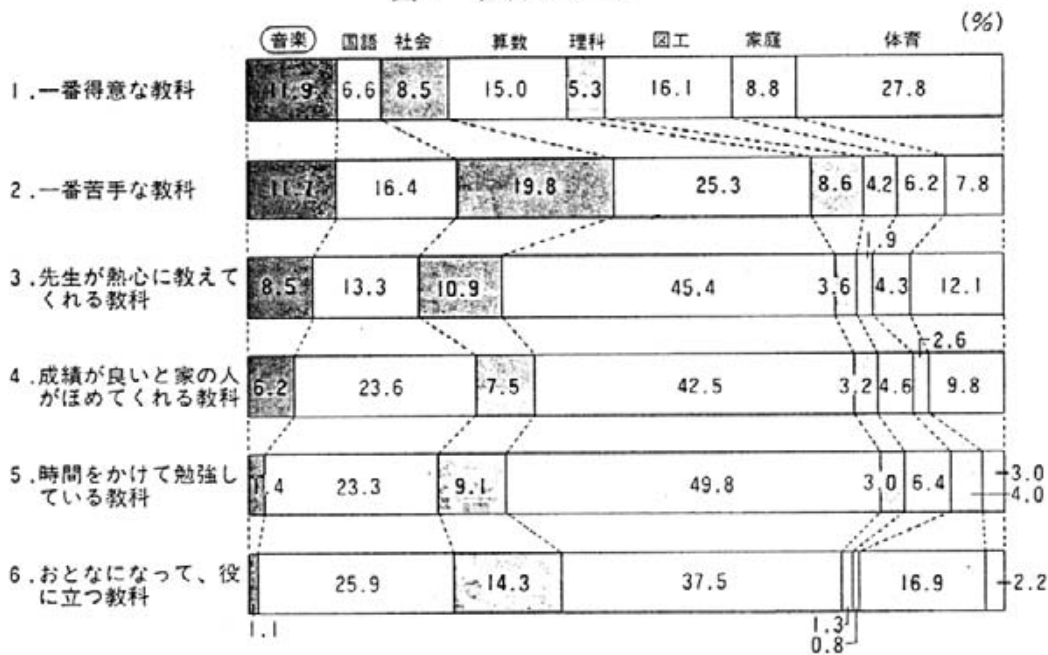


図2 音楽の勉強は好きか

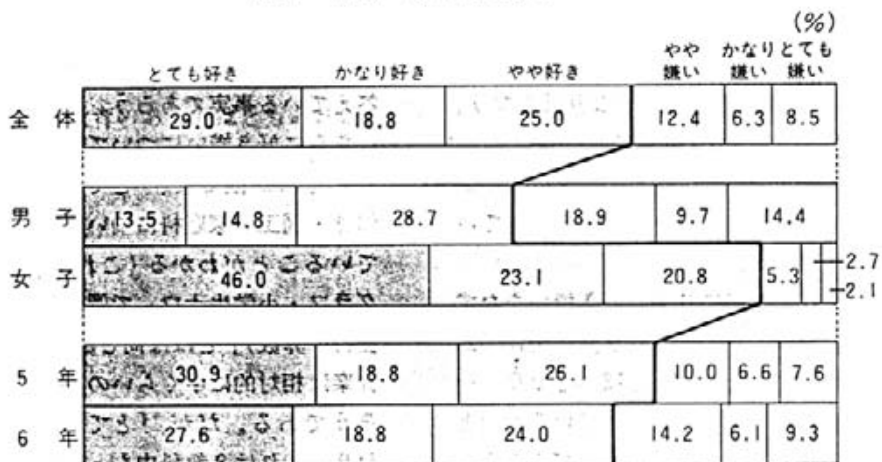


図3 教科の好き嫌い

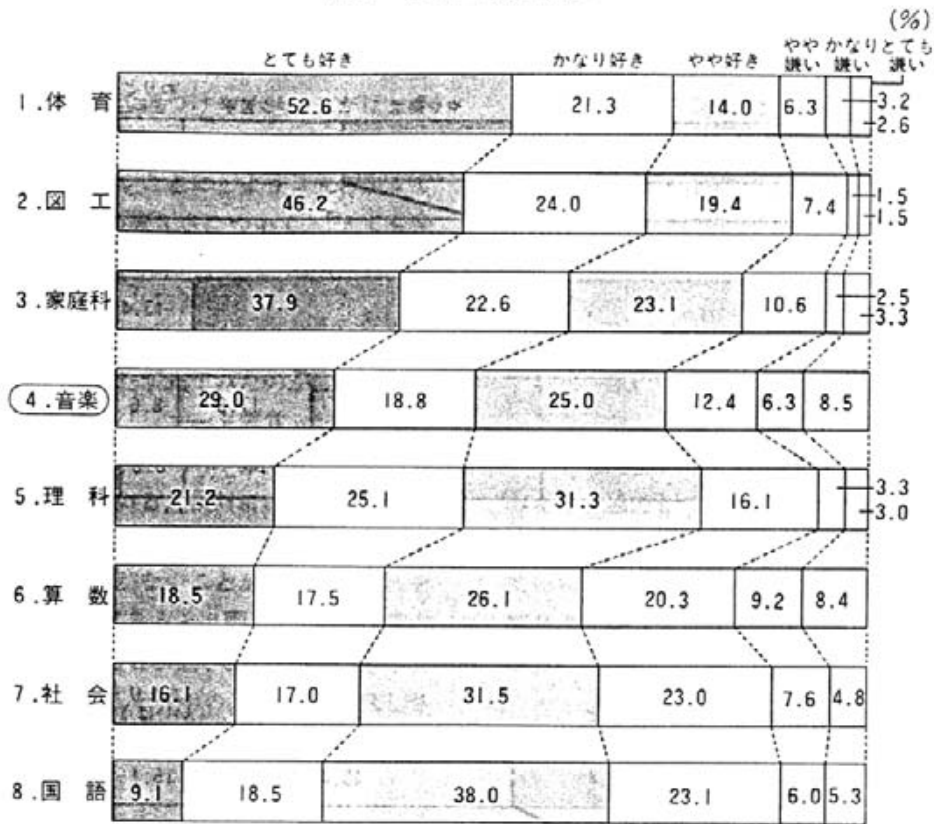


図4 音楽の授業の楽しさ

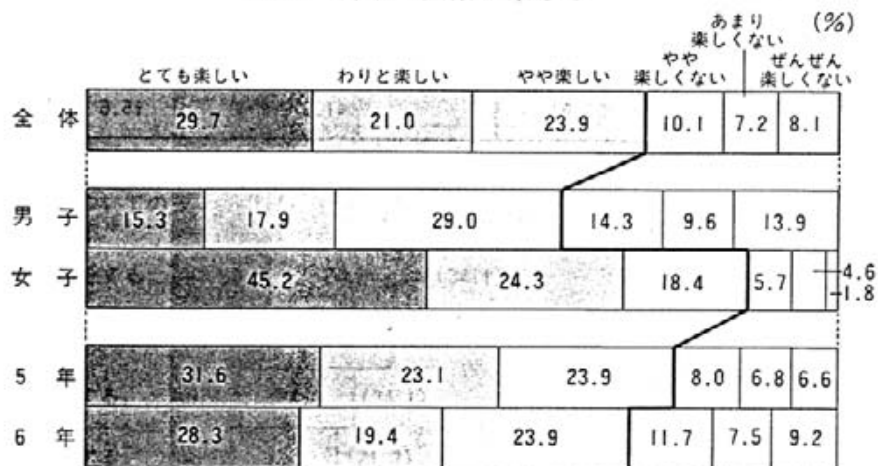


図5 音楽の得意さ

	(%)					
	とても得意	わりと得意	やや得意	やや苦手	わりと苦手	とても苦手
全体	15.6	23.3	22.1	21.6	8.5	8.9
男子	9.9	15.7	18.7	29.2	12.9	15.6
女子	23.8	31.4	25.8	13.4	3.8	1.8
5年	17.4	27.0	20.8	17.8	8.6	8.4
6年	14.2	20.4	23.1	24.4	8.5	9.4

図6 音楽の成績

	(%)				
	とてもいいほう	わりといいほう	ふつう	あまりいいほうではない	ぜんぜんいいほうではない
全体	12.9	25.4	40.4	15.1	6.2
男子	7.5	19.4	40.1	22.1	10.9
女子	18.8	31.8	40.6	7.7	1.1
5年	15.0	27.3	38.7	14.6	4.4
6年	11.3	23.9	41.6	15.6	7.6

授業での楽しさ

教科としての位置づけやイメージがはっきりしてきたところで、今度は音楽の授業内容についてみていくことにしよう。先の図4では、授業全体の楽しさについて、「とても楽しい」が30%（男子15%、女子45%）で、「やや」まで含めると75%に達していた。そこで、週2回の授業の中で、どんな内容の授業が楽しいのかをたずねてみたのが図7である。一番楽しいのが「レコード鑑賞」で、以下「合奏」「合唱」とごく一般的な授業内容のものが上位をしめている。反対に「ダンス（リズムにあわせて踊る）」「作詞・作曲」「歌のテスト」などは人気がないことがわかる。これを男女で比較してみると（図8）、どの授業内容も女子に受け入れられており、また学年別では、6年になると5年のときよりも、楽しさ

が減少していくことがわかる（図9）。ただし、「レコード鑑賞」などは、6年生のほうが楽しいと答えた割合がかなり高く、おもしろい結果であるように思えた。合奏や合唱などの活動的な要素の高いものにくらべて、レコード鑑賞は比較的楽に受けられる授業内容であるためだろうか。

現在、家に帰ればひとりでもレコードはともかく、ラジカセをきくことができるし、いくら高学年といっても小学生なのだから、みんなと協力して楽しむ合唱や合奏、ダンスなどの活動的な音楽を、もっと楽しいと答えていいと思うのだが、学校のレコード鑑賞は家庭とは違う楽しさを伴っているのだろうか。

図7 楽しい音楽の授業

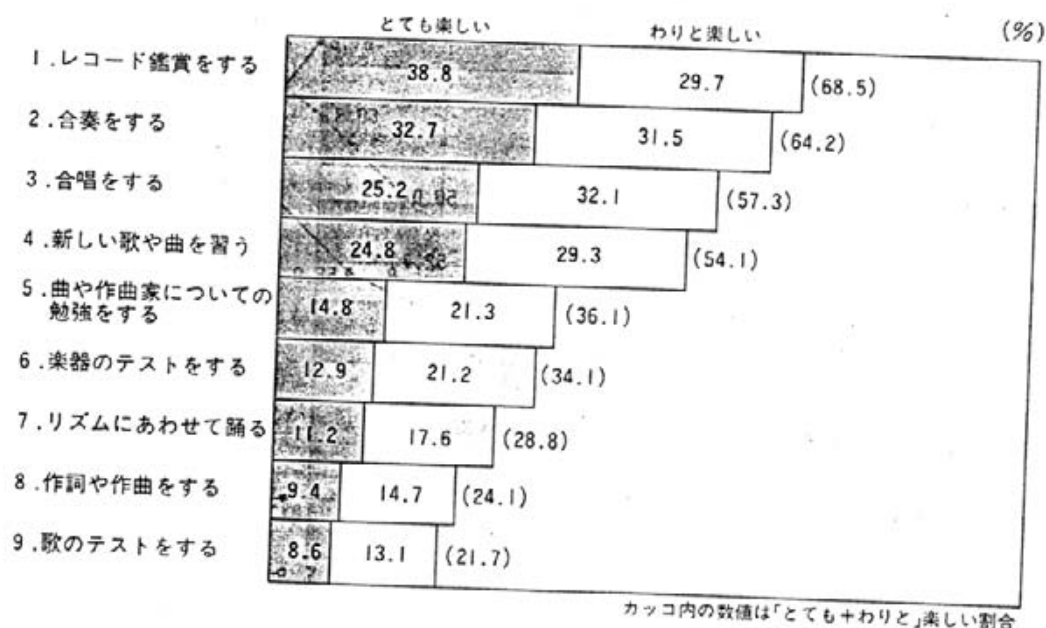


図8 楽しい音楽の授業(性別)

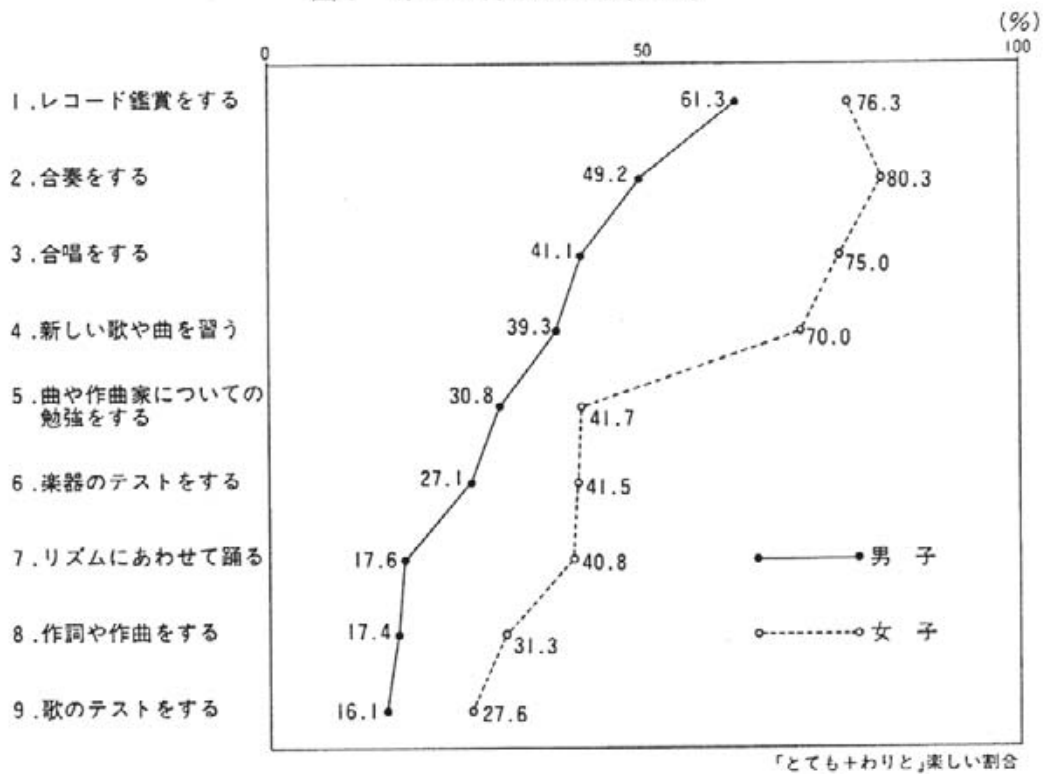
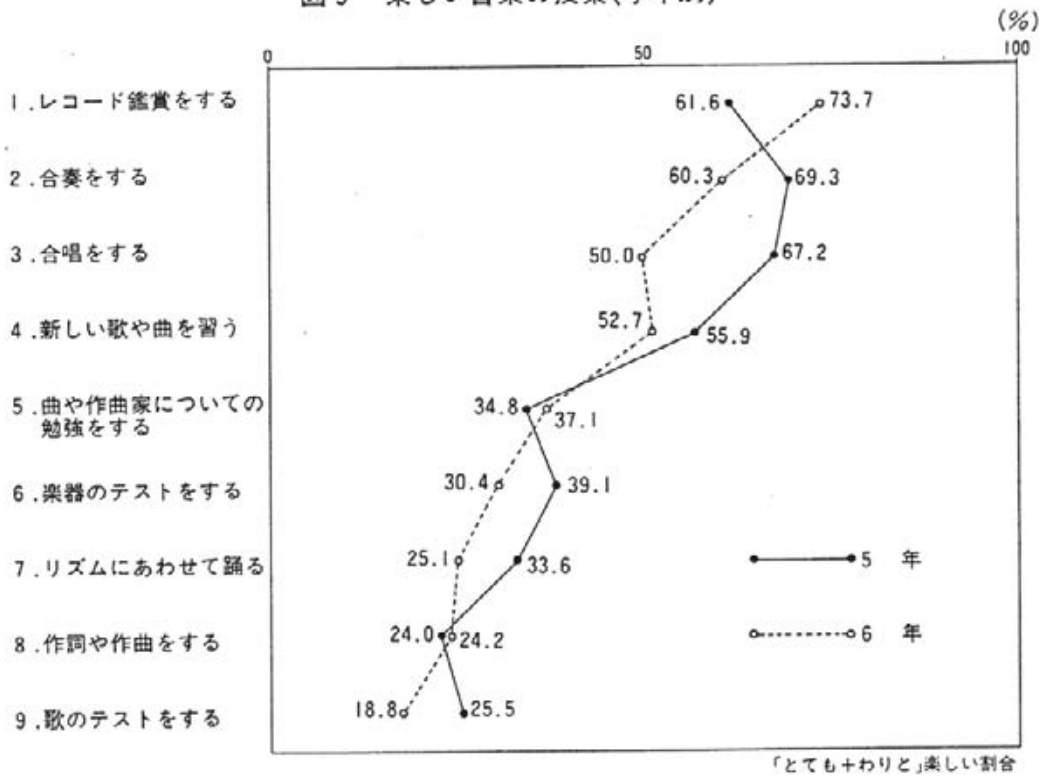


図9 楽しい音楽の授業(学年別)



授業での経験

次に、授業での経験をたずねたのが図10である。「よくある」に「ときどき」を含めた割合でみると、「合唱や合奏がうまくできた」(61%)、「次の時間も、音楽の勉強を続けたい」(48%)、「よい歌や名曲をきいて感動した」(41%)などの項目が上位であるが、決して高い数値でないことに気がつく。逆に「つまらない」(39%)、「よくわからない」(46%)、「遊んでいた」(25%)など授業でのマイナスの経験が意外に多いことがわかる。

一番好きな授業が「レコード鑑賞」と先に答えていたが、「よい歌や名曲をきいて感動した」経験の「ぜんぜんない」子が、31%にものぼるのは、いささか驚きである。さらに、「先生にほめられてうれしかった」経験の「ぜんぜんない」子も23%におよんでいる。これを男女別にみたのが図11で、プラスのイメージの項目では女子が、マイナスのイメージの項目は男子が、それぞれ高い数値を示していることがわかる。男子は、女子にくら

図10 音楽の授業での経験

	よくある	ときどきある	1,2回ある	ぜんぜんない (%)
1. 次の時間も、音楽の勉強を続けたいと思ったこと	24.1	24.2	24.5	27.2
2. 合唱や合奏がうまくできたこと	21.5	39.1	25.2	14.2
3. よい歌や名曲をきいて感動したこと	16.6	24.0	28.5	30.9
4. つまらなと思ったこと	16.4	22.1	34.6	26.9
5. むずかしくて、よくわからなかったこと	16.1	29.7	36.3	17.9
6. こっそり勉強以外のことをして遊んでいたこと	10.8	14.5	32.2	42.5
7. 先生にほめられてうれしかったこと	7.2	34.5	35.4	22.9
8. 授業後、曲や歌について調べたこと	10.4	23.2	63.7	2.7

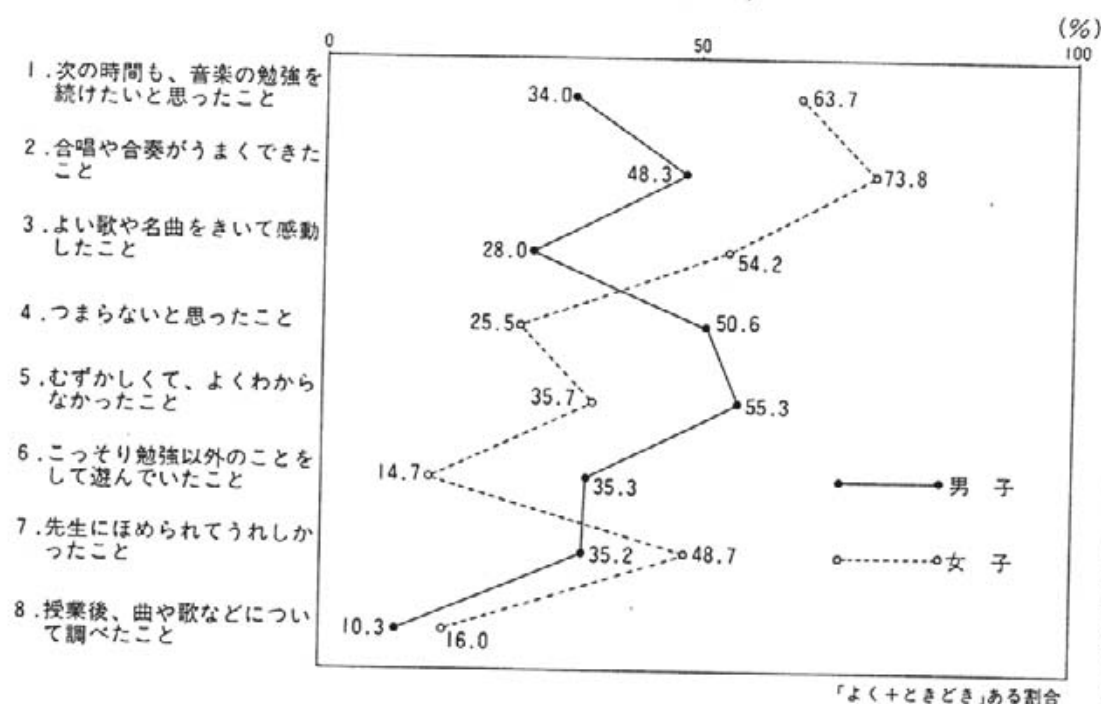
べて、うまくできた、ほめられた、感動したなどの楽しい体験に欠け、結局のところ授業がよくわからず、つまらないので、遊んだりふざけたりするようになるのであろう。これらが男子の音楽に対する苦手意識や成績の悪さなどをひきおこすひとつの原因となっているのだらう。

もうひとつ、男子の音楽離れについて、こんな話がある。6年生の男子に直接聞いた話だが、「体育は、教科の中で男らしい教科であり、音楽は女っぽい教科である。だから男の自分は、音楽をあまりまじめにやる気がしない。それに成績が良くても、それほどうれしくない」と言うのだ。全体的に男子にはそのような傾向があり、たしかに、それは筆者の小学生時代から続いてきている気がする。

しかし、いつごろから、そのような観念が音楽に定着してきたのだろうか。

テレビをつければ、女性歌手と同じように男性の歌手や音楽家がいるし、オーケストラや指揮者は、まさに男性天国のような職業のように思える。特に、このところ若者の間で男女を超えて音楽を好む傾向が強いから、女っぽさを感じることで、男子が音楽を嫌っているのは小学生特有の傾向なのであろうか。しかし、体育は活動的で、音楽は非活動的であるなどの理由で、誤ったイメージをもつ子が多く、そして、そうした見方を取り除く力を音楽は果たしていないのである。したがって、音楽は教科として、問題解決をする課題が多く残っているといえよう。

図11 音楽の授業での経験(性別)



音楽の得意な理由

さて、表1をごらんいただきたい。音楽の授業での経験と成績の自己評価をクロスさせたものである。当然のことではあるが、成績の良い子は、1～5までのどの項目も高い経験率を示しており、逆に成績の良いくない子は、

6～8までのマイナスのイメージの項目に高い数値を示している。授業での経験や楽しさ、成績の良し悪しから、音楽に対しても得意な子と苦手な子をつくりだしているのは、自然なことかもしれないが、では音楽の得意な子

表1 音楽の授業での経験×音楽の成績の自己評価

授業での経験	音楽の成績の自己評価 (%)				
	とてもいいほう	わりと いいほう	ふつう	あまりいい ほうではない	ぜんぜんいい ほうではない
1. 合唱や合奏がうまくできたこと	87.9	77.1	58.7	35.3	11.3
2. 次の時間も、音楽の勉強を続けたいと思ったこと	79.3	59.7	43.8	28.1	15.5
3. 先生にほめられてうれしかったこと	72.4	55.5	34.3	25.2	9.7
4. よい歌や名曲をきいて感動したこと	61.1	48.8	36.6	31.2	16.9
5. 授業後、曲や歌などについて調べたこと	29.3	13.4	9.5	10.9	5.6
6. むずかしくて、よくわからなくなかったこと	27.5	33.4	48.5	65.7	77.6
7. つまらないと思ったこと	21.4	27.3	38.4	56.2	77.8
8. こっそり勉強以外のことをして遊んでいたこと	15.5	21.5	23.1	34.1	50.0

「よく+ときどき」ある割合

は、どうしてそうなったのであろうか(図12)。「とてもそう思う」に「わりと」を含めた割合でみると、「音楽が好きだから」(64%)、「授業をきちんと受けているから」(43%)などが、その理由として上位にあげられており、「音楽をよくきく」「生まれつきの才能」などは、あまり関係がないと答えている。小学生にとって、学校の音楽は才能や練習よりも、音楽

が好きで、まじめに授業を受けていることが大切であるという認識である。こうした学習努力を大事に考える傾向は、算数や社会などの評価にも認められたが、音楽などは才能が大事だと子どもが答えると思っていた。それだけに音楽についてもまじめが大事というのは予想外であった。

図12 音楽の得意な理由

	(%)				
	とても そう思う	わりと そう思う	少し そう思う	あまり そう思わない	ぜんぜん そう思わない
1. 音楽が好きだから	36.5	27.0	18.6	10.4	7.5
2. 授業をきちんと受けているから	20.8	21.9	25.3	21.1	10.9
3. ピアノなどの習い事をしているから	15.1	19.9	20.0	15.5	29.5
4. 家でよく練習しているから	15.1	15.9	20.6	23.3	25.1
5. テレビ、ラジオ、レコードなどで音楽をよくきいているから	11.2	15.8	19.3	32.0	21.7
6. 生まれつき音楽の才能があるから	5.4	9.5	20.8	34.6	29.7

将来への影響

では、学校で学んでいる音楽は、子どもたちの将来にどのような影響を与えていると考えているのでしょうか。以下、将来への有効性というかたちでたずねた結果を紹介しておこう。図13は、将来、自分が仕事をしていくうえで、音楽はどのくらい役に立つかを質問したものである。どの項目も「どちらともいえない」割合が高いものの、上位は「いろいろな歌や曲を知っている」「楽譜がよめる」などで、それぞれ高い数値を示している。ダンスや歌がうまいことは、工作上あまり役に立たないと判断をしている。たしかに、音楽は趣味の領域に属するものであろうから、これは子ど

もたちの、きちんとよく考えた評価のように思う。そこで同一項目で、家庭生活に、音楽はどのくらい役に立つかをたずねてみた(図14)。傾向としては、図13とほぼ同じなので、違いがよくわかるようにくらべた図15をみてみよう。全体的には、ほぼ同数値となっているものの「いろいろな歌や曲を知っている」「楽器の演奏がうまい」「歌がうまい」の3項目では、家庭生活に役に立つ割合が高くなっている。なんとなく、家庭生活の匂いを感じる項目だけに、なるほどという気持ちがある。

図13 将来の仕事に役立つか

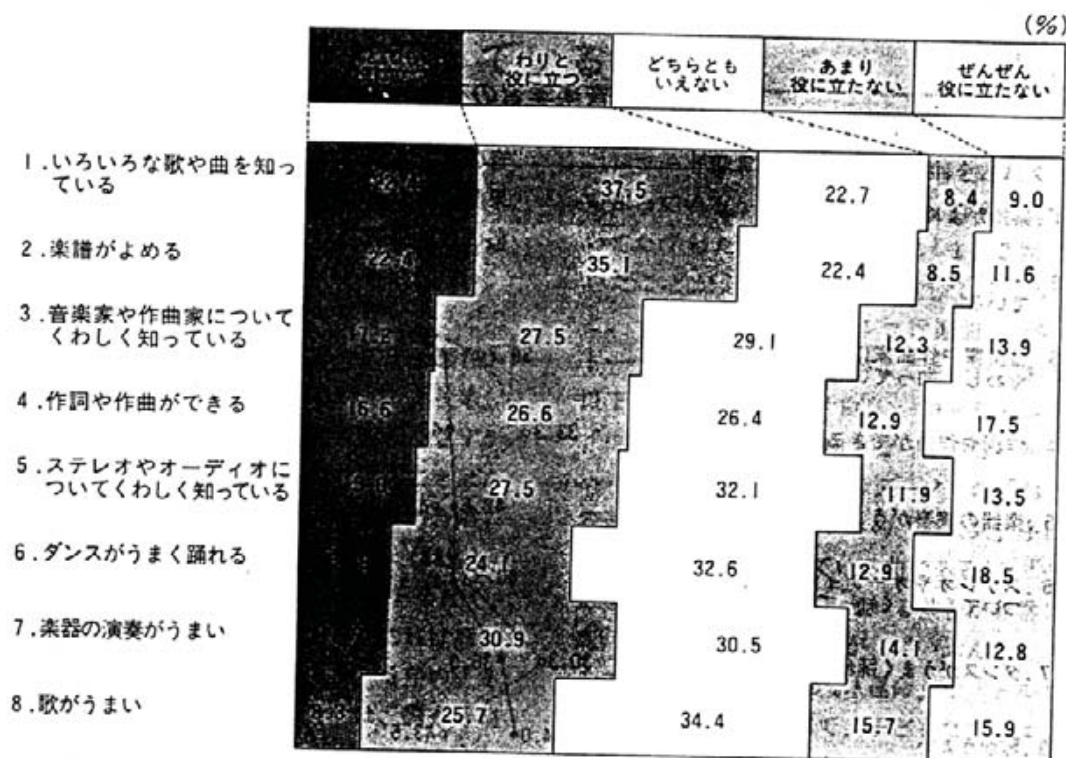


図14 将来の家庭生活に役立つか

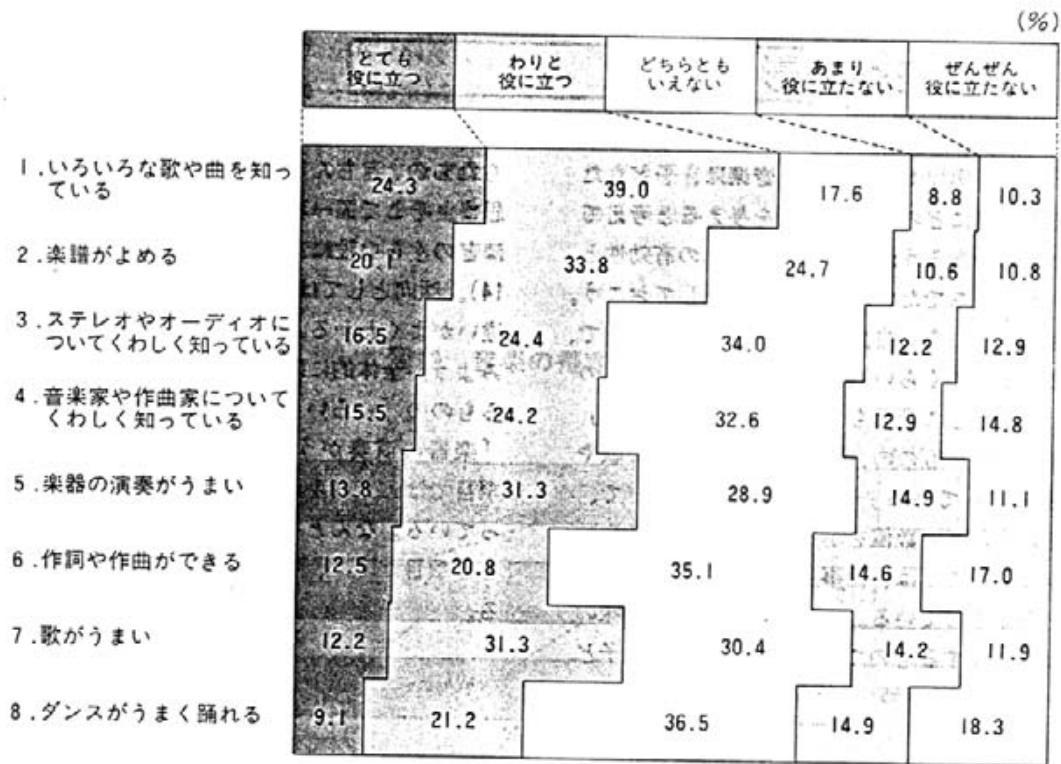
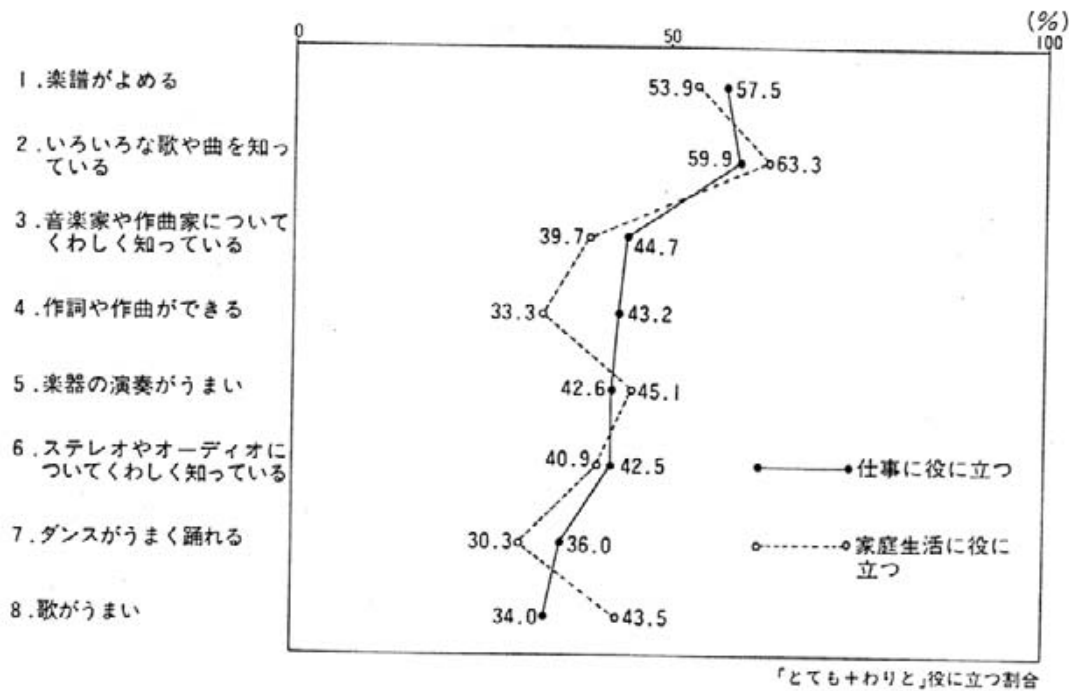


図15 音楽学習の有効性



2. 音楽の知識



うたえる歌と知っている曲

これまでは、子どもたちに教科としての音楽に対する意識や経験についてたずねた結果を紹介してきたので、今度は、音楽学習の達成度や知識についてみていくことにしたい。

まず、いままで習った歌や曲などを、どのくらい知っているかをたずねたのが、図16と図17である。好き嫌いは別にして、「校歌」は95%もの子がうたえるとしており、さすがに5～6年間もうたってきただけのことはあると感じさせられる。以下「かえるの合唱」(93%)、2年で習う「春が来た」(88%)、「線路は続くよどこまでも」(80%)と続く。「君が代」も73%となっており、これは高い数値とみるべきなのであろう。5年の「冬げしき」と6年の「ふるさと」は、調査時期にまだ学習していなかったため、このような低い数値になったものと考えられる。

レコード鑑賞についても、名前をどれくらい知っているかというかたちで、計8曲についてたずねた。「よくきく」に「1、2回聞いたことがある」を含めた割合でみると、モーツァルトの「トルコ行進曲」、ベートーベンの「運命」などがよくきかれており、以下サンサーンスの「白鳥」、ロッシーニの「ウィリアムテル」序曲となっている。バッハの「ポロネーズ」やアンダーソンの「おどる子ねこ」、そしてスッペの「軽騎兵」序曲などは、すでに習っている曲であるが、「ぜんぜん知らない」と答えている割合が非常に高い。学校で習った時期が、ずいぶん前であることも考えられるが、「運命」や「トルコ行進曲」などにくらべて、子どもたちには、なじみにくい曲なのであろうか。機会があれば、本当の曲をレコードやカセットで実際に

きいてもらい、「きいた経験があるかどうか」や「好き嫌い」などについて調査してみたいと考えている。

比較をしたものである。やはり、ここでも女子の数値が男子を大きく上まわっていることがわかる。

図18、図19は、図16、図17について男女の

図16 うたえる歌

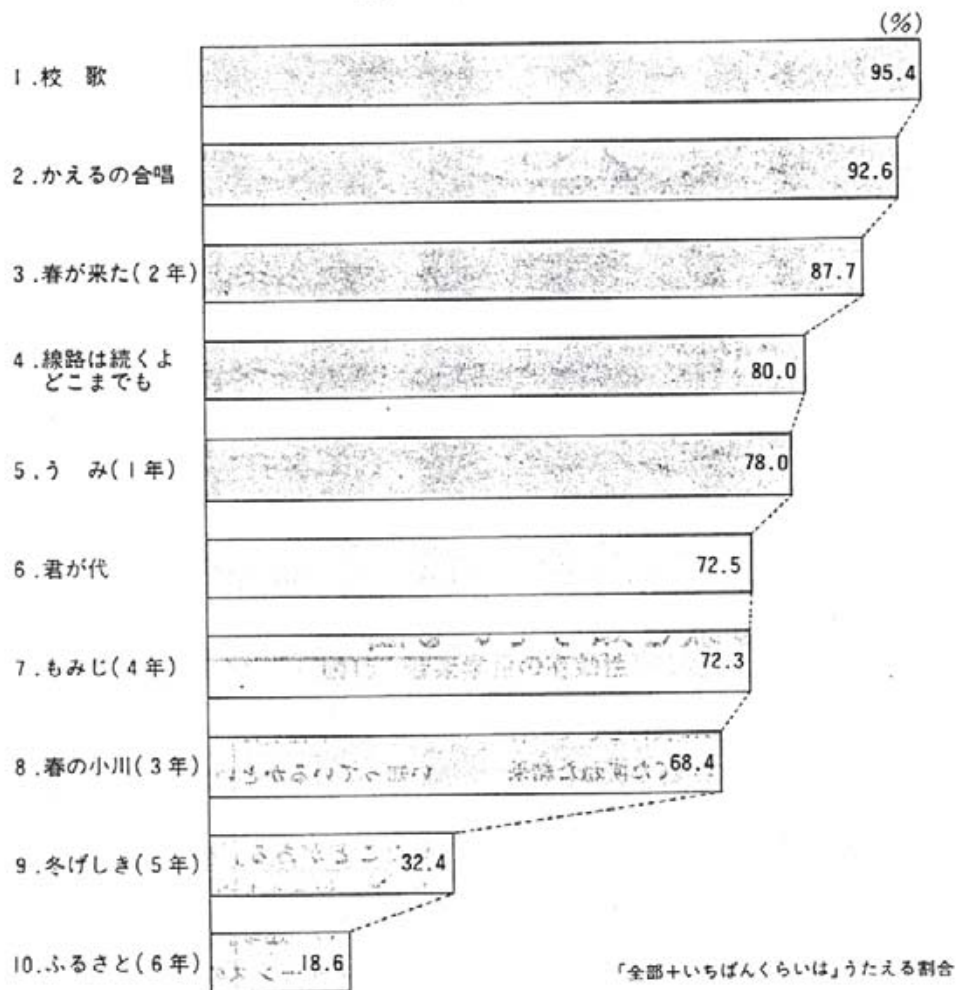
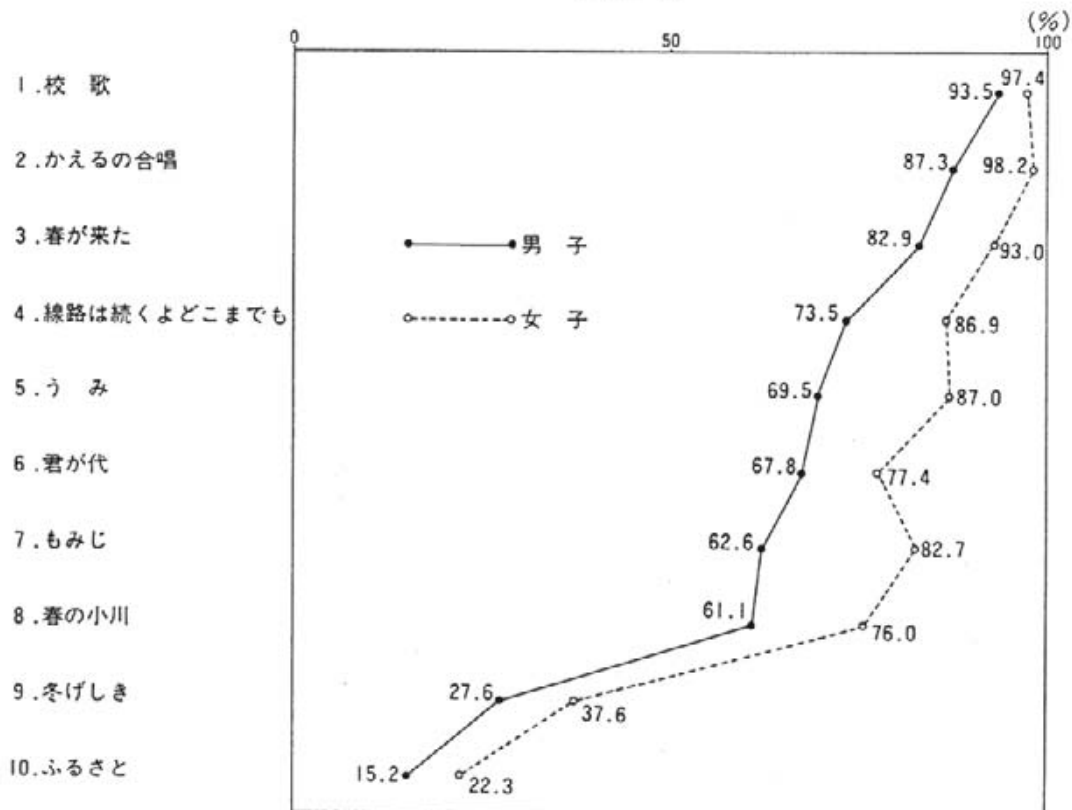


図17 知っている曲

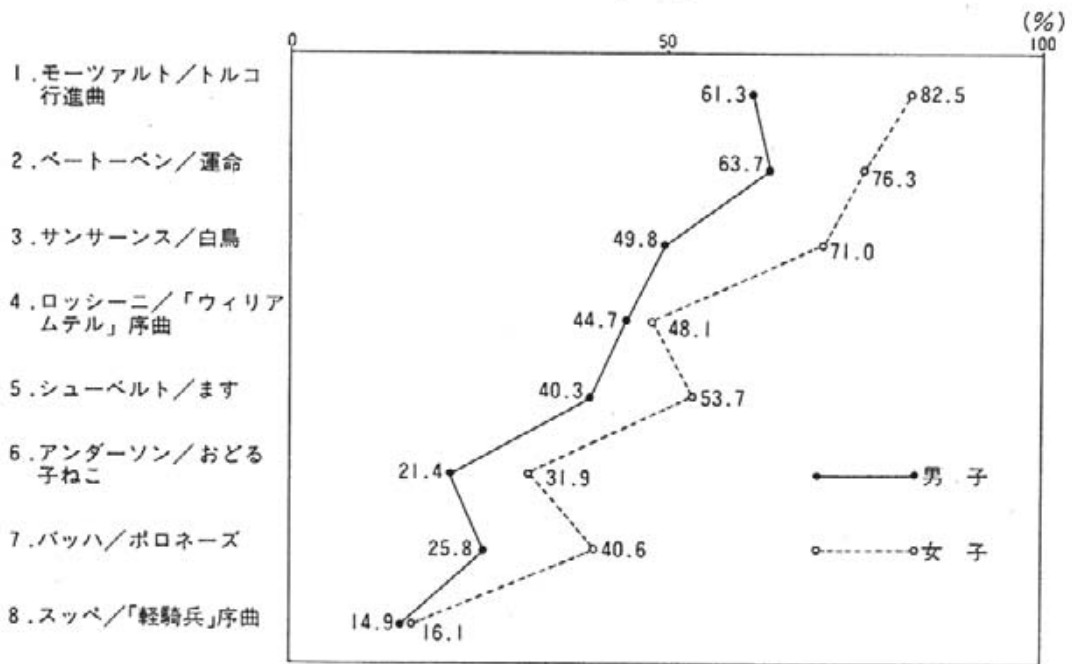
	よくきく	1、2回 きいたことがある	名前は 知っている	ぜんぜん 知らない
1. モーツァルト/トルコ 行進曲	39.3	32.2	12.9	15.6
2. ベートーベン/運命	38.5	31.3	12.7	17.5
3. サンサーンス/白鳥	29.9	30.1	12.2	27.8
4. ロッシーニ/「ウィリア ムテル」序曲	21.9	24.4	12.9	40.8
5. シューベルト/ます	18.0	28.8	13.6	39.6
6. アンダーソン/おどる 子ねこ	15.9	10.6	12.0	61.5
7. バッハ/ポロネーズ	11.8	21.2	18.9	48.1
8. スッペ/「軽騎兵」序曲	4.4	11.1	12.5	72.0

図18 うたえる歌(性別)



「全部+いちばんくらいは」うたえる割合

図19 知っている曲(性別)



「よくきく+1、2回きいたことがある」割合

たも家話 モカ% モビアす き てるし

音楽の知識

表2は、これまでの音楽学習をまとめるかたちで、簡単な音楽クイズにチャレンジしてもらった結果である。問題は計10問で、作曲家の母国、ピアノの鍵盤の音、曲名、音符や記号についてなどである。

まず、ベートーベン、チャイコフスキー、モーツァルトの生まれた国を、7つの選択肢から選んでもらったが、結果は順に40%、30%、26%の正答率で、意外に低かった。特に、モーツァルトをフランス人とした誤答が30%以上もあり、驚かされた。正答のオーストリアという国が、子どもたちには、なじみがうすかったためとも考えられよう。

ピアノの音を答える問題は、比較的よくできており9割前後の正答率であったが、#(シャープ)がついたときは多少誤答が増えていることがわかる。次に、よく知られている「春が来た」の冒頭の4小節を五線符で示し、題名をたずねた。結果は全体の4分の3

が正解であったが、男子の正答率は6割程度にとどまった。この曲は2年で習ったやさしい曲であるから、もう少しできていいはずだが、それは高望みなのであろうか。

最後に、音符や記号についてだが、ト音記号は83%と高い正答率であるが、男子の4分の1は、不正解であることがわかる。ト音記号は、音楽の基礎的知識であるし、5・6年生がこれを知らないというのも相当問題であろう。また8分音符は、4分音符や16分音符と間違いやすかったためか、全体で6割にもみまない正答率であった。ここでも、男子の正答率が非常に低いという印象をうける。

もし、音楽という教科が、これからも学校教育の中で取り扱われ、発展していくのであれば、女子だけでなく、男子をどのように授業にむかせ、活動的な授業を展開していくかが、ひとつの重要なポイントになるのではないだろうか。

表2 音楽クイズの正答率

(%)

ジャンル	問題の内容	全体の正答率	男子	女子
作曲家の生まれた国	1. ベートーベンの生まれた国(ドイツ)	40.2	39.3	41.1
	2. チャイコフスキーの生まれた国(ソ連・ロシア)	30.3	30.8	29.5
	3. モーツァルトの生まれた国(オーストリア)	25.8	25.6	26.2
ピアノの音	4. レ の 音	90.5	84.8	96.4
	5. シ の 音	88.4	82.2	95.0
	6. ファ#(シャープ)の音	76.1	66.9	85.8
曲名	7. 春が来た	75.1	62.4	88.4
音符や休符などの記号	8. ト音記号 	83.3	74.8	92.1
	9. 全休符 	64.8	56.8	73.1
	10. 8分音符 	56.8	49.3	64.7

(不等号は5%を単位として差を表す)

3. 家庭での音楽



ここまでは、学校における教科としての音楽を、いろいろな視点（角度）からさぐってきたので、今度は子どもたちが家庭に帰って

から、音楽とどのようにつきあい、どんな意識をもっているかをさぐってみることにしよう。

音楽の習い事

まず、子どもたちがどんな習い事をしているかを示したのが図20である。「ピアノなどの楽器」の習い事は、「スポーツのクラブ」「学習塾」「そろばんや習字」について、4番めに位置し、全体の4分の1が習っている。それを男女別にみると、女子は42%にもおよび、男子は10%にもみたくないことがわかる。将来の花嫁修業ではなかろうが、女の子たちの音楽に対する愛着度は、ここでも相当なものともみることができる。

習っている楽器は、ピアノが圧倒的に多く、ついでエレクトーンなどの電子オルガンで、

これらの鍵盤楽器が全体の85%以上をしめていることがわかる(表3)。

また、楽器を1週間に何回習っているかをたずねたのが図21で、週1回がおよそ60%、週2回が11%、週3回が11%となっており、週1～2回程度がごく平均的な回数といえよう。また週4回以上は19%もあり、7回以上習っているモーレッツな子も3%いることがわかる。

習い始めた時期は「小学校入学前」が39%、「1年生」19%、「2年生」12%で、小学校低学年までに7割以上が習い始める計算で

ある(図22)。音楽などの芸術教育は、幼い頃からの英才教育が必要だとよくいわれるが、これもその反映であろうか。図23では、現在、習っている楽器の習い事を、いつまで習うつもりかをたずねたが、近未来である「小学校卒業まで」(33%)と「中学校卒業まで」(23%)が全体の半数以上をしめており、「もうすぐやめる」(9%)を含めると65%の子が、近いうちにやめるつもりであると答えている。音楽に限らず、この頃の習い事は4年生くらいまでで、そこから学習塾通いに切りかえる子が多い。それでは、せっかくやってきた習

い事が身につかないのではと思う。そんな中でも、「一生続けていきたい」と答えている熱心な子も16%おり、将来の自分の生活に、音楽や習い事が密接につながっているだろうと感じているのかもしれない。

なお実際、近い将来やめると答えた子の理由として、レッスンが厳しい、先生とあわない、親に強制的に習わされたなどが考えられようが、なんらかの理由でやめたいと思ったことのある子は、習っている子の4分の3にもおよぶことがわかる(図24)。

図20 習い事

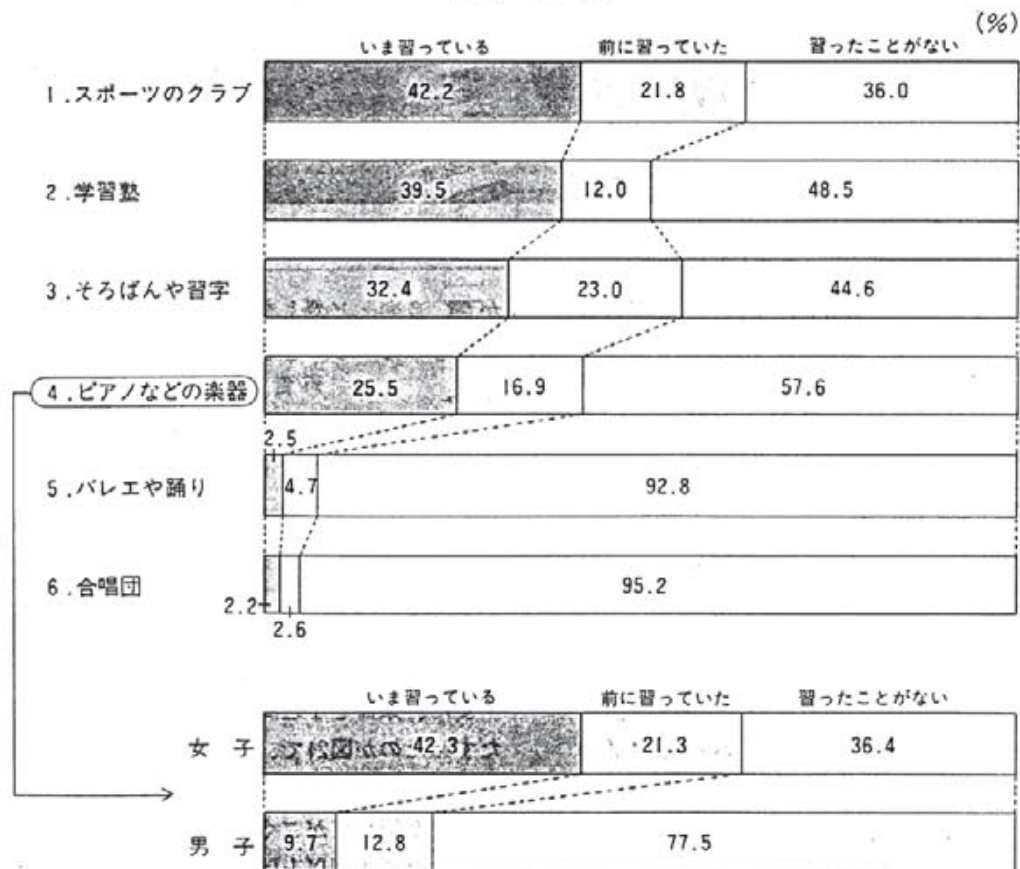


表3 習っている楽器

順位	楽器	(%)
1	ピアノ	73.7
2	電子オルガン	11.9
3	トランペット	6.4
4	バイオリン	5.2
4	琴	5.2
6	ギター	4.3
6	フルート	4.3
8	三味線	3.7
	その他	7.3

図21 週に何回習っているか(楽器の習い事)

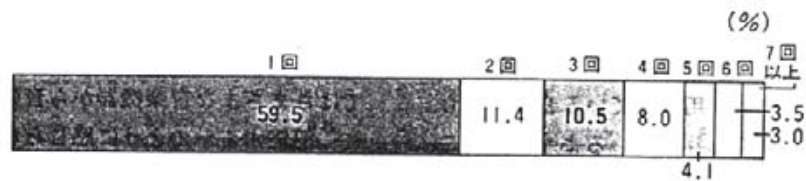


図22 いつから習い始めたか(楽器の習い事)

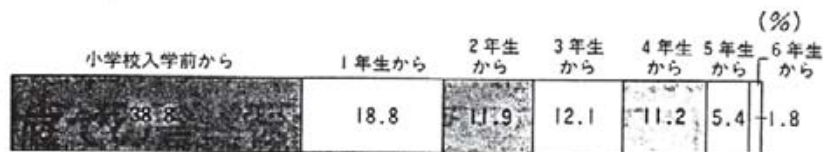
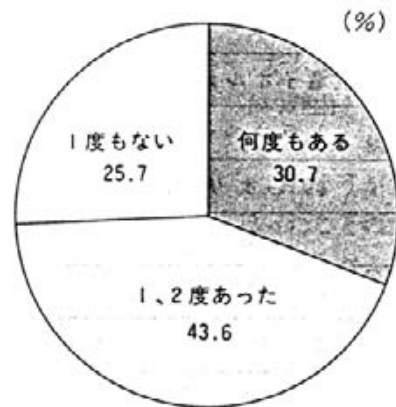


図23 いつまで習うつもりか(楽器の習い事)



図24 やめたいと思った経験(楽器の習い事)



家にあるもの

豊かな社会といわれる現在、一般家庭ではさまざまな機械類が使用されている。ひと昔前と違い、家庭で使用されている音楽機器も多種多様に、様変わりしているようだ。そこで、どんな音楽機器が子どもたちの家にあるのかをたずねたのが図25である。

「ステレオやラジカセ」がほぼ9割、「楽譜」や「ビデオ」は6割以上、「ウォークマン」も5割以上とたいへん普及していることがわかる。「ピアノ」は4割、「カラオケの機械」も3割ちかくがある。また、最近はやりの「CDプレーヤー」や「電子楽器（シンセサイザーや電子オルガン）」も2割以上の家庭に普及している。今後も、これらの音楽機器は、さらに一般家庭に普及していくことは間違いのないだろう。発売されて間もない高価

な「レーザーディスク」も、1割ちかく普及していることには、驚かされる。将来、家庭ではさまざまな音楽機器から音楽がみちあふれ、氾濫するかに感じられた。

それだけに、旧態依然とした学校の音楽室が見おとりするように思えてならないが、それはともかく図26では、実際に子どもたちが自分の物として、どのくらいレコードやカセットテープを持っているかをたずねた。それによると、なんらかのかたちで自分用のレコードを持っている子は53%、カセットテープになると85%もの子が持っていることがわかる。値段や便利さからいっても、カセットテープが子どもたちの生活に密着していることがわかる。

図25 家にある音楽用具

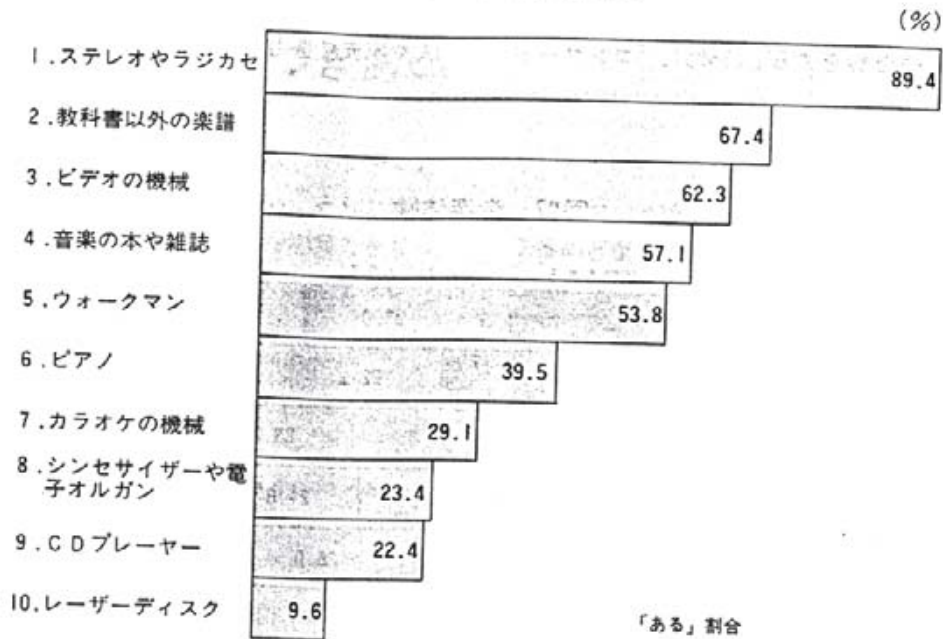
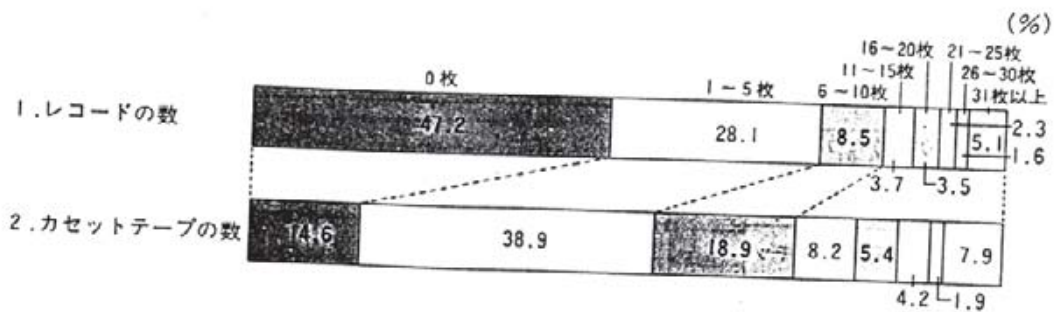


図26 自分専用の持ち物



家庭での音楽体験

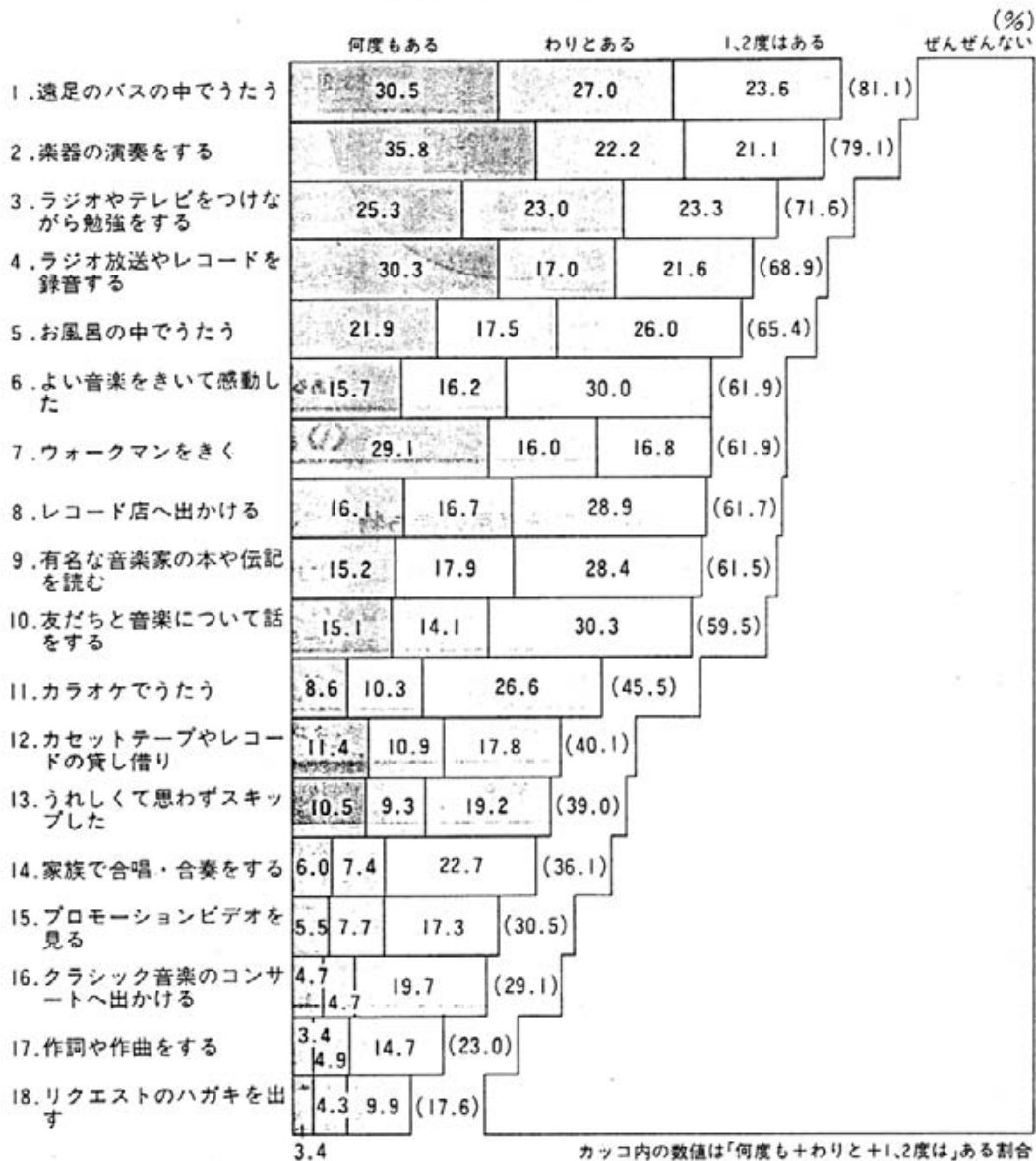
子どもたちが、多くの音楽機器にかこまれ家庭生活をおくっていることがわかったところで、ではどんな音楽体験をもっているのだろうか。その頻度をたずねたのが図27である。「遠足のバスの中で歌をうたった経験」(約8割)を基準にみていくことにしよう。「何度もある」から「1、2度」までを含めてみると、「楽器の演奏」(79%)、「ラジオや

テレビをつけながらの勉強」(72%)、「音楽の録音」(69%)、「お風呂の中でうたう」(65%)、「よい音楽をきいて感動した」(62%)、「ウォークマンをきく」(62%)、「レコード店へ出かける」(62%)、「音楽家の伝記を読む」(62%)、「友だちと音楽の話をする」(60%)などが上位にきており、どれも60%以上の経験率である。「カラオケ」の経験も46%

と高く、子どもたちの豊かな経験を物語っている。逆に、「スキップする」(39%)、「家族で合唱や合奏をする」(36%)、「コンサート

へ出かける」(29%)などは意外に経験率が低く、こうした経験がもう少し増えるよう本人や家族で努力するべきであろう。

図27 音楽体験



テレビとのつきあい

子どもの家庭生活を語るとき、テレビをぬきにしては語るができない。それだけにテレビは、子どもたちに絶大な影響力をもっている。そこでここでは、テレビと音楽について、さぐっていくことにしたい。

まず、どんなテレビ番組を見るかを、ジャンル別に示したのが図28である。「よく見る」に「わりと」を含めると、「マンガ」が81%と圧倒的な人気である。以下、「スポー

ツ」「バラエティー」「ニュース」「映画」「ドラマ」と続き、そして音楽番組は39%で、7番めとなる。男女別に比較してみると(図29)、男子はスポーツと映画を、女子はドラマと音楽や歌番組を好んでいることがわかる。先の章でもあげた体育の男子、音楽の女子が、このテレビの好みにも表れているようだ。

次に、テレビの内容を音楽にしぼってみよう。図30は、よく見る音楽番組について、た

図28 よく見るテレビ番組

	よく見る					あまり見ない			ぜんぜん見ない
	よく見る	わりと見る	たまに見る	あまり見ない	ぜんぜん見ない	あまり見ない	たまに見る	ぜんぜん見ない	
1. マンガ	60.4	20.8	11.8	5.1	1.9				
2. お笑いなどのバラエティー番組	30.1	20.8	19.9	16.6	12.6				
3. スポーツ	29.9	21.4	21.1	19.0	8.6				
4. 映画	25.0	20.4	28.9	18.5	7.2				
5. ドラマ	23.8	22.2	25.3	17.6	11.1				
6. 音楽や歌番組	22.6	16.1	22.1	20.1	19.1				
7. ニュース	17.4	31.1	32.3	14.0	5.2				
8. 教育番組	5.7	10.8	22.0	28.3	33.2				

ずねた結果である。最近、視聴率が下がってきたといわれる年に1度の国民的イベント・NHKの「紅白歌合戦」や「レコード大賞」は、子どもたちにも人気が高く、「よく見る」に「ときどき」を含めると、8割と6割が見ていると答えている。ごく普通の日には、やはり「歌謡曲のベストテン番組」や「ものまね、歌まね番組」がよく見られている。古くからあるNHKの「みんなの歌」も5割以上が見ており、この番組の根強い人気を感じさせる。「ク

ラシック音楽のコンサート番組」は、おとな向けにつくられているし、番組自体が少ないためもあろう、3割程度にとどまっているのが現状のようである。

さらに図31は、それを男女別に比較したもののだが、「紅白歌合戦」は、男子も7割以上がなんらかのかたちで見ているものの、あとはすべて5割にもみたくない。逆に女子は、ベストテン番組を中心に、歌番組をよく見ていることがわかる。

図29 よく見るテレビ番組(性別)

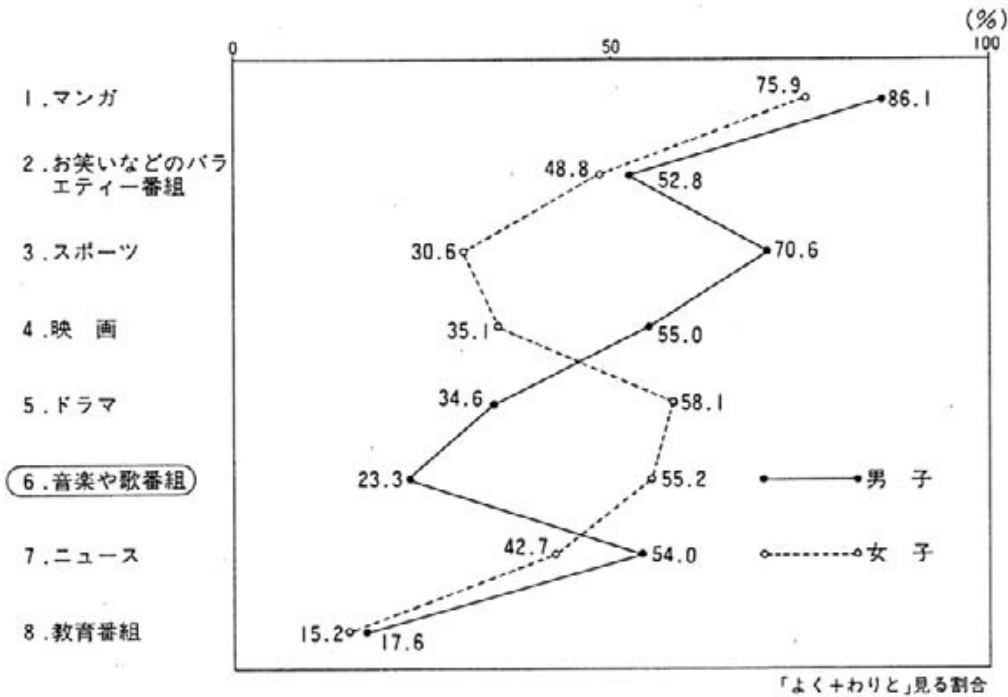


図30 よく見る音楽番組

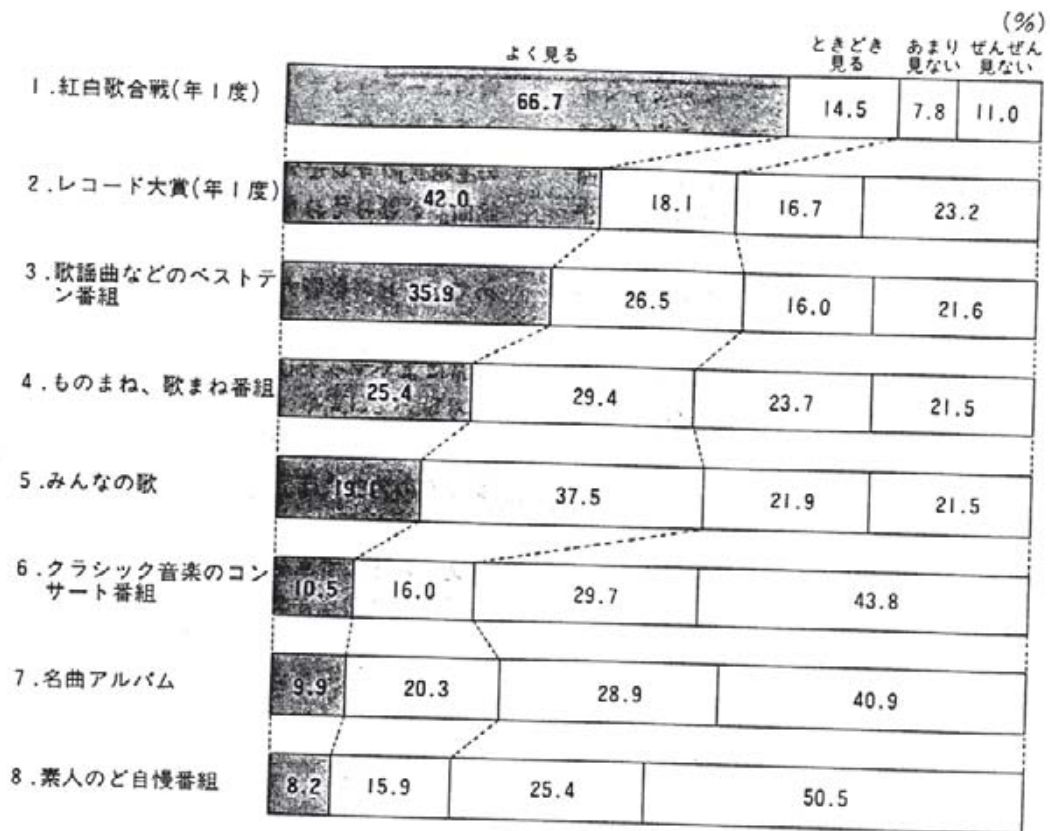
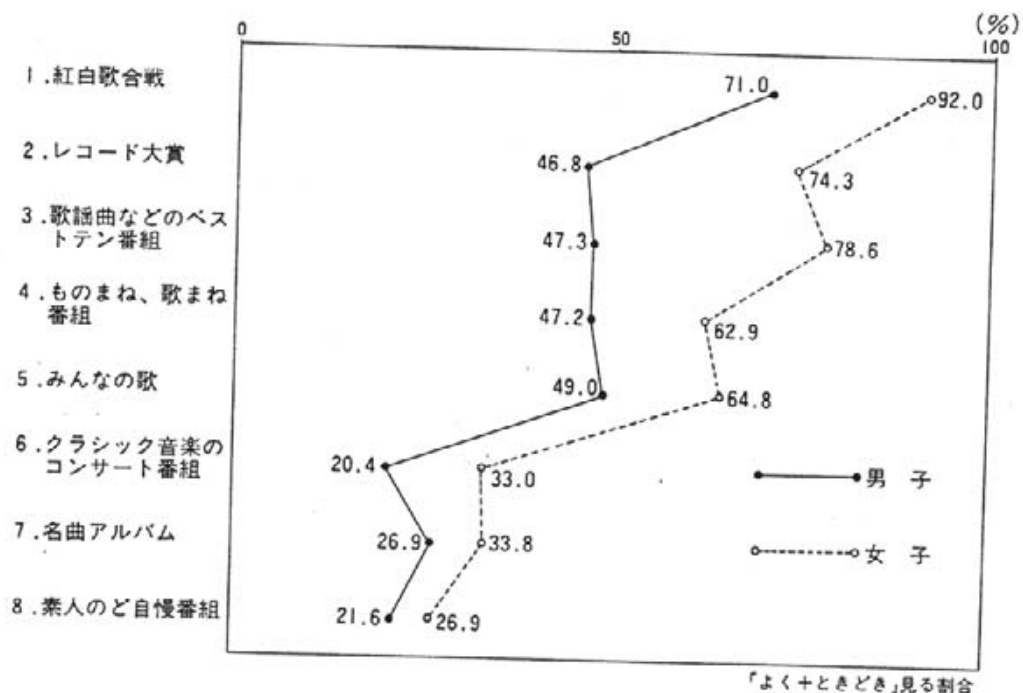


図31 よく見る音楽番組(性別)



「よく+ときどき」見る割合

好きな音楽

子どもたちは、学校で唱歌やクラシックの名曲などを学習する一方、家庭では歌謡曲やコマーシャル音楽、テレビゲームの音楽、さまざまな外国の音楽などに接している。さらに、ピアノなどの楽器を習っている者もあろう。そういった意味では、かなり非統一的な多種の音楽を自然に受け入れている日常生活である。そこで、子どもたちが本当は、どんな歌や曲が好きなのかをたずねてみることにした。

図32は、好きな音楽の種類をたずねたものである。どの項目も「どちらともいえない」割合が高いものの、「好き」と答えた数値の

大きいものから順にあげていくと、「テレビの主題歌」「テレビゲームの音楽」、そして「歌謡曲」となっており、「コマーシャルの音楽」なども受け入れられていることから、あらためてテレビの影響力の大きさに驚いてしまう。現代の子どもたちの音楽の好みは、テレビと非常によくマッチしているということなのであろう。

レコード鑑賞好きの子どもたちは「クラシックの名曲」は、わりあい好きなものの、「学校で習う音楽」は3分の1程度が好きと答えているにすぎない。どうして、こんなにも「学校で習う音楽」に人気がないのであろう

図32 好きな音楽の種類

	(%)		
	好き	どちらとも いえない	嫌い
1. テレビの主題歌	53.1	35.9	11.0
2. テレビゲームの音楽	51.6	37.1	11.3
3. 歌謡曲やアイドル歌手の歌	46.9	30.0	23.1
4. ベートーベンやモーツァルトなどの作曲した名曲	43.9	39.9	16.2
5. コマーシャルの音楽	39.2	46.0	14.8
6. 学校で習う音楽	35.9	48.1	16.0
7. ロック、ジャズ、ポップスなどの外国の音楽	24.2	42.6	33.2
8. シンセサイザーなどの電子音楽	21.3	51.1	27.6

う。

さて、好きな音楽の種類を、男女別で比較してみると(図33)、男女の好みがはっきり分かれることがわかる。「テレビゲームの音楽」は、断然男子に好まれ、「歌謡曲やアイドル歌手の歌」、それに「学校で習う音楽」が女子に好まれている。それぞれ30%以上も差があり、ふだんの生活や遊びの内容、話題などの差が、このような好みの差に反映されているようだ。

それにしても、「学校で習う音楽」を好きな男子が2割にもみない事実は、やはり大きな問題といえよう。

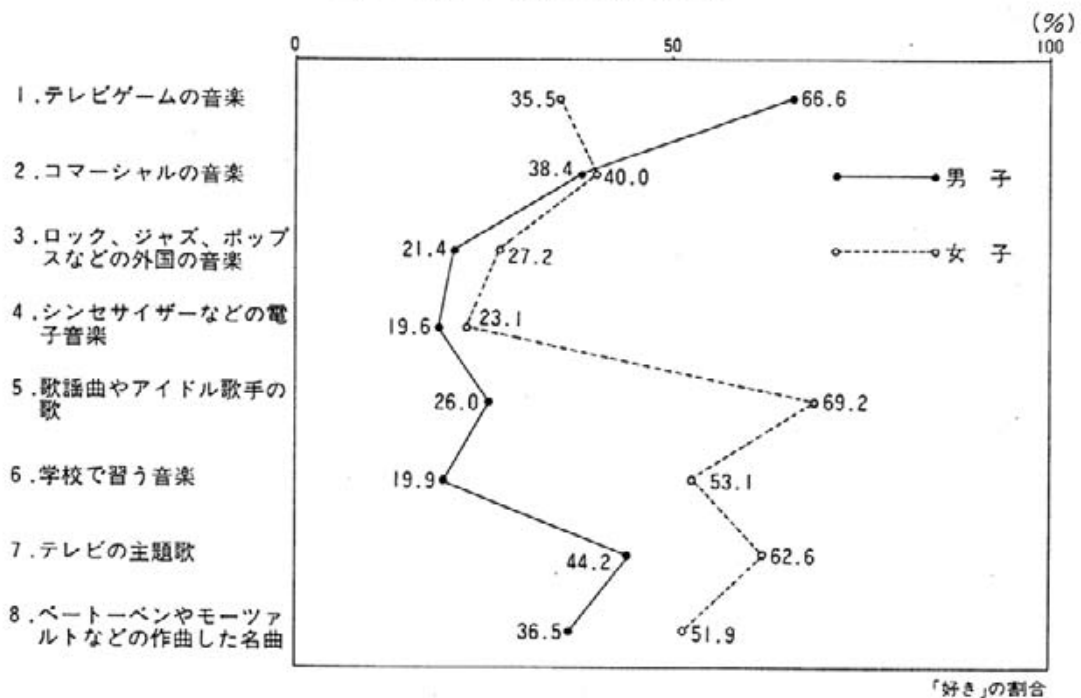
音楽の好みが、おおよそあきらかにされたので、今度は「いま現在、一番好きな曲や歌はなにか」について、フリーアンサーでたずねた結果を紹介しておこう。表4は、得票数にしたがってまとめたものである。1,173人が選んだ、約120曲の中から堂々第1位となったのは、ベートーベン「運命」であった。

歌謡曲やテレビゲームの音楽が隆盛している昨今ではあるが、さすがにベートーベンの偉大さを感じてしまう。あの有名な冒頭の「ジャジャジャーン」のメロディは、印象的で覚えやすいので、子どもたちにも人気があるのであろう。2位は、人気アイドル歌手・中山美穂の「派手!!!」であった。

この表を見て驚いたことは、ベスト10のうち5曲が、クラシック音楽の名曲であることだ。「トルコ行進曲」や「新世界」「カルメン」「ウィリアムテル」序曲などは、たしかに有名だが、現在の小学生から、これだけ人気があるとは予想外であった。子どもらしく、アンケートに対してかっこうをつけた気がしないでもないが、素直な気持ちで読みとるなら、最近の音楽の中に、子どもたちの心をしっかりつかまえたよい曲が数少ないということかもしれない。

他の5曲中、4曲はテレビなどでおなじみの歌謡曲のヒット曲で、8位には最近流行の

図33 好きな音楽の種類(性別)



テレビゲームの音楽（ドラゴンクエストII）が入っている。

以下、11位～30位までをおおまかにみていくと、クラシックの曲が5曲、テレビの主題

歌が4曲で、残りは全部歌謡曲やアイドル歌手の曲でしめられている。ちなみに、「校歌」は3票、「君が代」は2票入っただけであった。

表4 いま、一番好きな曲

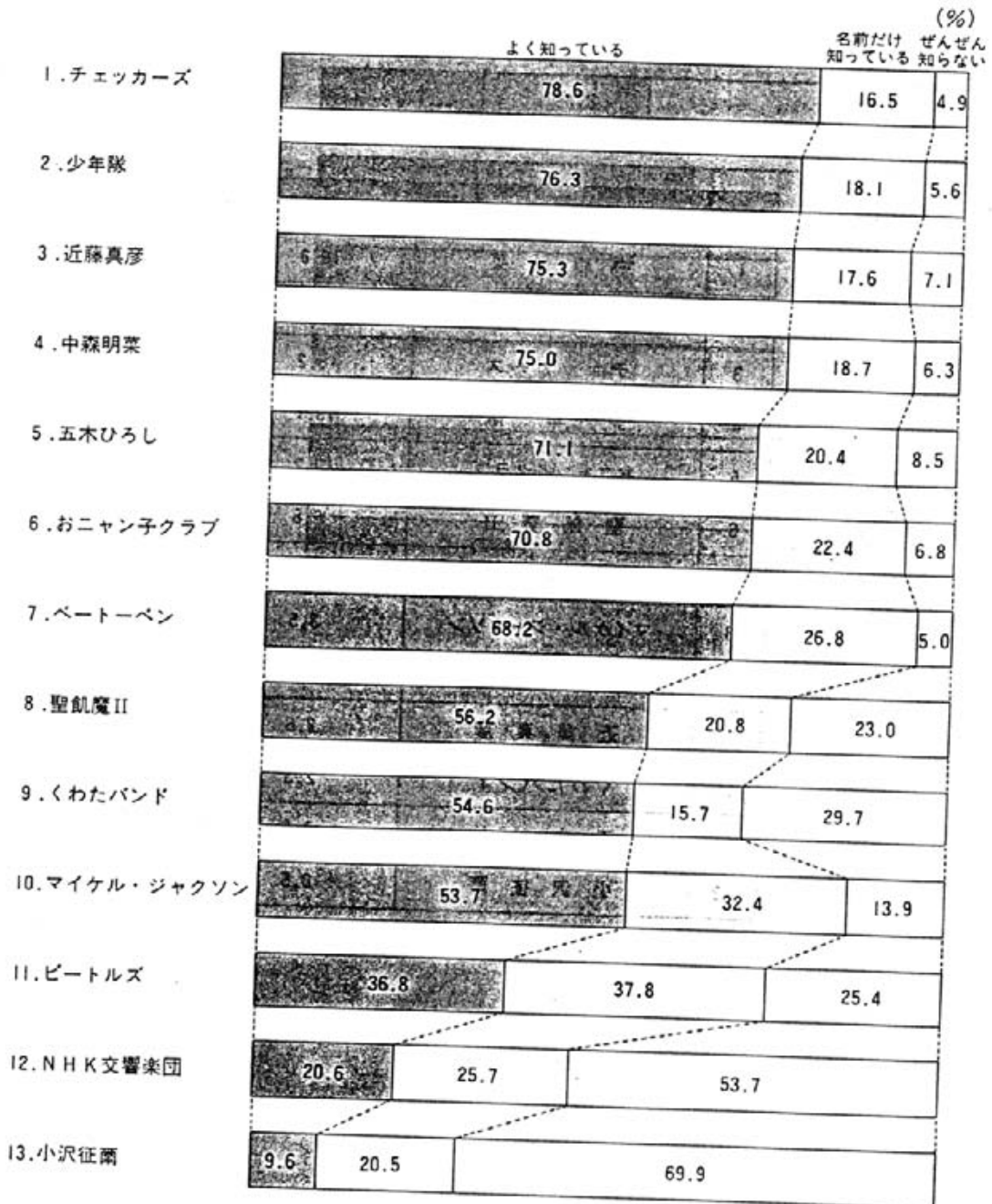
順位	作曲者・歌手/曲名	得票数	順位	作曲者・歌手/曲名	得票数
1	ベートーベン/運命	66	18	中森明菜/タンゴノワール	8
2	中山美穂/派手!!!	58	"	うしろゆびさされ組/うしろゆびさされ組	8
3	モーツァルト/トルコ行進曲	32	21	ハチャトリアン/剣の舞	7
4	ドボルザーク/新世界	27	"	ドラエモン	7
5	南野陽子/話しかけたかった	26	"	荻野目洋子/ダンシング・ヒーロー	7
6	ビゼー/「カルメン」組曲	22	"	少年隊/仮面舞踏会	7
7	チューブ/サマードリーム	20	"	ビーバップハイスクール	7
8	ドラゴンクエストIIの音楽	19	"	吉 幾三/雪国	7
9	ロッシーニ/「ウィリアムテル」序曲	18	"	チャイコフスキー/白鳥の湖	7
10	アルフィー/サファイアの瞳	17	28	ベートーベン/エリーゼのために	6
11	サンサーンス/白鳥	15	"	BaBe/I don't know	6
12	とんねるず/めいわくでしょうが	14	30	中森明菜/デザイアー	5
"	斉藤由貴/砂の城	14	"	聖闘士星矢の音楽	5
14	松田聖子/ストロベリータイム	10	"	吉 幾三/オラ、東京さ行くだ	5
"	中森明菜/ジブシークィーン	10	"	チェッカーズ/ギザギザハートの子守唄	5
"	ドラゴンボールの音楽	10	※ 校歌 3 君が代 2 その他 多数		
17	北斗の拳	9			
18	シューベルト/ます	8			

知っている人物

図34は、13の音楽関係の人物やグループについて、子どもたちが「よく知っている」か

どうかを、たずねた結果である。
上位は、チェッカーズや少年隊などのテレ

図34 よく知っている人・グループ



ビでおなじみのヤングアイドルが中心で、ビートルズやマイケル・ジャクソンなどの外国のミュージシャンは、あまり知られていないことがわかる。特にクラシック音楽関係の人物や団体は子どもたちになじみがうすく、ほとんど知られていないようである。だがベートーベンの知名度は高く、「よく知っている」に「名前だけ知っている」を含めると95%にもなることがわかる。

そして、表5は、図34でたずねた13人につ

いて、だれが一番有名だと思うかを選んでもらった結果である。1位は中森明菜、2位はベートーベン、3位はチェッカーズであった。

さらに、子どもたちが将来どんな職業につきたいかを、音楽関係の仕事にしばってたずねたのが図35である。ごらんとおり、どの職業も「とてもなりたい」と答えている者が10%にもみえない。将来、音楽の仕事を自分の職業にしていこうと考える者は、非常に希薄であることがわかる。

表5 有名だと思う人・グループ

順位	名 前	(%)
1	中 森 明 菜	19.3
2	ベ ー ト ー ベ ン	16.9
3	チ ェ ッ カ ー ズ	15.2
4	少 年 隊	13.1
5	おニャン子クラブ	10.2
6	聖 飢 魔 II	6.8
7	ビ ー ト ル ズ	4.4
8	マイケル・ジャクソン	3.5
9	NHK交響楽団	3.0
10	近 藤 真 彦	2.6
11	くわたバンド	2.3
12	五 木 ひろし	2.2
13	小 沢 征 爾	0.5

図35 なりたい音楽の職業

(%)

	とても なりたい	少し なりたい	あまり なりたくない	ぜんぜん なりたくない
1. プロの楽器演奏者 (ピアニ ストやバイオリニストなど)	9.2	16.6	26.8	47.4
2. 歌手 (五木ひろしや中森明 菜のような)	9.1	18.1	25.1	47.7
3. 学校の音楽の先生	6.4	17.3	24.3	52.0
4. ベートーベンやモーツァル トのような作曲家	6.1	17.2	31.5	45.2
5. 作詞や作曲をする人	4.9	14.1	27.6	53.4
6. オーケストラの指揮者	10.8	32.2	52.7	
7. ロックやポップスなどのミ ュージシャン	8.2	23.9	63.7	
8. 楽器を作る人	10.6	27.8	58.9	

2.7

両親と音楽の関係

最後に、両親と音楽の関係についての調査結果を紹介しておこう(図36)。図の6項目に対して、両親ともそうでない割合がかなり高いものの、少なくとも両親の一方がそうである割合が高いのが「音楽をきくのが好き」と「カセットテープやレコードをたくさん持

っている」の2項目で、それぞれ6割以上である。逆に「コンサートによく出かける」「楽器の演奏がうまい」などは2～3割程度で、かなり低い数値である。

そして、父親と母親を比較してみると、「カセットテープなどをたくさん持っている」以

図36 両親と音楽

	(%)			
	父も母もそう	父がそう	母がそう	父も母もそうでない
1. 音楽をきくのが好き	29.9	11.2	21.1	37.8
2. カセットテープやレコードをたくさん持っている	23.6	25.8	15.6	35.0
3. 小学校のとき音楽が得意だった	12.0	5.5	26.4	56.1
4. 歌がうまい	1.8	11.4	22.7	54.1
5. コンサートによく出かける	4.9	9.6	83.7	
6. 楽器をうまくひく	4.7	8.1	15.7	71.5

外の5項目は、すべて母親がそうである割合が高い。子どもたちの中で、女子が特に音楽と密接な関係にあったのと同様、ここ家庭内でも、母親の影響力が強いことがうかがえる。

さらに、表6は「将来、家庭生活に役立つこと」と「両親が音楽をきくのが好きか」をクロスさせた結果である。この結果をみると、両親とも音楽をきくのが好きな家庭の子どもは、家庭生活を豊かにするのに、いろいろな音楽の要素が必要であると考えており、両親

や家庭の生活環境から受ける影響力の大きさを、あらためて感じないわけにはいかない。

音楽を好きな子、大切にする子、楽しむ子は、家庭生活でも両親からそのような影響を受け、自然と音楽に対する考えや態度、接し方などを身につけていくものと考えられる。

そういった意味で、現在の子どもたちが音楽を楽しみ、愛する心をより一層育て、将来の家庭生活を豊かにしていけるように願ってやまない。

表6 将来、楽しい家庭生活をつくるのに役立つこと×両親が音楽をきくのが好きか

(%)

音楽をきくのが好き 将来、家庭生活に役立つこと	音楽をきくのが好き			
	父も母もそう	母がそう	父がそう	父も母も そうでない
1. いろいろな歌や曲を知っている	76.0	>	66.8	68.3 >> 52.4
2. 楽譜がよめる	69.5	>	56.5	55.6 > 41.3
3. 楽器の演奏がうまくできる	59.7	>	49.1	44.4 > 34.0
4. 歌が上手にうたえる	56.7	>	49.3	45.2 > 33.0
5. 音楽家や作曲家についてくわしく知っている	53.2	>	44.5	> 36.3 > 29.1
6. ステレオやオーディオについてくわしく知っている	51.5	>	39.0	43.5 > 33.7
7. 作詞や作曲ができる	45.0	>	35.5	> 30.0 25.5
8. ダンスがうまく踊れる	40.4	>	31.7	27.6 24.6

「とても+わりと」役に立つ割合
(不等号は5%を単位として差を表す)

まとめに代えて

現在のように、多種の音楽が社会をとりまき、氾濫している時代も、人類史上初めてのことにちがいない。テレビやラジオをつければ、世界の国々のさまざまな音楽が流れてくるし、都会ではひと晩に、いたるところでさまざまなコンサートが開かれ、本当に音楽の豊かな時代というにふさわしい気がする。

しかし、今回の調査結果をみると、そうした恩恵を受けて、子どもたちが豊かに音楽を楽しんでいるとは思えないようであった。逆に音楽嫌いの子どもを作り出している気さえしてくる。

たしかに、学校教育の音楽の果たす役割は本当に重要で、これまでに多くの成果をあげてきたことは事実であるが、ここにきて、ひとつの転換期をむかえていると言っても過言ではなからう。ひと昔前の唱歌中心の音楽とクラシック音楽にかたよったレコード鑑賞から多少なりとも脱皮して、現代の子どもたちにマッチした、より活動的で楽しい音楽の授業への転換が進んでいる。そしてそうした努力はかなり実を結んだようにも思える。しかし、今後さらに、そうした工夫が必要であら

う。そうすることによって、男子の音楽離れにも、多少の効果は期待できるはずである。

だからといって、常に子どもの嗜好にあわせ、音楽を与えていけばよいというものでもなく、私たちおとなが、よいセンスとしっかりとした教育方針をもって、発育期の子どもたちにふさわしい音楽を選択していかねばならないだろう。それには、家庭での音楽環境の充実も必要であろう。

学校での音楽、習い事の音楽、家庭での音楽と、音楽は3つの領域にまたがっている。それだけに、特に3つの環境がうまく統合され、子どもたちにマッチしたかたちで、未来の子どもたちの成長にかかわっていくことが望ましいのではないだろうか。

それと同時に、これからの学校音楽では、テレビやラジカセなどを視野に入れて、学校でなければできない音楽教育の開発に乗りだすべきなのであろう。クラスに40人の仲間がいて、いっしょに時を過ごしている。そうした集団性をよりどころにして、より楽しい音楽作りに活路を見いだしてほしいと思った。

※おことわり：本文中に使用した写真は本文・テーマとはいっさい関係ありません。